条約廃棄後の中ソ関係　信濃毎日新聞-1979.04.20

条約廃棄後の中ソ関係

「不確定な80年代」象徴

危機・雪解けの可能性共存

パンテレーエフ氏の論文を読んで

中嶋嶺雄

中ソ冷戦ともいえる今日の中ソ関係に二つの時代が画された。

去る四月十一日は、中ソ友好同盟相互援助条約の処置いかんという期限であったが、中国側がそれに先立つ四月三日、同条約の廃棄をソ連側にたいし一方的に通告したことは、やはり、きわめて重要な歴史的出来事であった。

戦後秩序の終えん

第一に、一九五〇年に締結された中ソ友好同盟条約は、発生的には米英ソ三国のヤルタ協定（密約）に基づく一九四五年のソ連と蔣介石政権との中ソ友好同盟条約の中華人民共和国版としての性格を有するものであったが、明年四月の期限満了に伴ってこの条約が消滅することは、戦後国際秩序の基軸となったヤルタ＝ポツダム体制が文字通り最後的終焉を迎えることを意味するからである。それだけに、今回のドラマは、一九八〇年代以降の世界がいかなる国際秩序を形成し得るのか、まったく不確定であることを如実に示している。

第二には、すでに久しく「名存実亡（有名無実）」であったとはいえ、この条約の廃棄が中ソ冷戦下、最近では中越戦争が発生していたことを思うとき、中国の今回の措置はいわば対ソ最後通牒に等しいものになり得るからである。

こうした状況が存在しただけに、たしかに日中平和友好条約締結時の日本側への約束によって条約の廃棄それ自体はすでに中国側の既定方針であったとはいえ、中国側はまさに薄氷を踏む思いで今回の処置を決定したものと思われる。中越戦争に際して表明されたように、ソ連側はすでに一九六八年のチェコへの軍事介入のときと同様の"制限主権論"の立場に立って中国に対処しようとしていたのであるから、ソ連側からすれば、対中行動にたいする拘束力はもはや国際法上も道義上もなくなり、ソ連は中国にたいしていかなる行動もなし得るブリーハンドを獲得したことになり、状況の推移いかんによっては、中国は未曾有の国家的危機を招きかねないからである。

両国とも慎重な対処

では、まさに、このような中ソ関係の極限的な悪化という危機的状況のなかで、次のステップとして中ソ戦争へと事態は発展してゆくのであろうか。巷間、中ソ戦争必至説も多いが、この点では状況をさらに冷静に分析してみなければならない。

まず中国側は、今回の一方的な廃棄通告にもかかわらず、そのことがソ連を決定的に刺激することを回避するために大いに意を用いていた。今日明らかになっているところによると、廃棄通告に先がけて中国側は、三月三十一日にシチェルバコフ駐中国ソ連大使と黄華外相との秘密接触を北京でおこなって衝撃緩和措置をとり、条約廃棄に当っては、同条約が日本を仮想敵国とした戦後遺制的なものであることを主にソ連側に伝え、しかも当初伝えられた新華社声明などによる一方的通告とは異なり、黄華外相が正式の外交ルートを通じてソ連大使に直接通告し、同時に、政府レベルの中ソ関係改善の話合いを提案したのであった。しかも国内的には新たな反ソ・キャンペーンを行うこともなく、きわめて冷静かつ慎重に対処したことであった。

これにたいしてソ連側は、当然、対中非難の論評をおこないつつあるとはいえ、やはりきわめて慎重であり、むしろ長期的な展望に立って、中ソ関係の改善を模索しようとしている様子がうかがわれる。十七日にグロムイコ外相、中国側の会談提唱にたいし、会談の議題、目的をまず示すよう回答、成否を預けたことにも表われている。ソ連は、今日の中国内政の方向が一連の非毛沢東化の進行過程で従来の毛沢東時代の対ソ認識とは大きく異なる地点へと収斂しつつあることに注目し、そうした状況のなかで中国内部では、彭徳懐元国防相のような名実ともに「中国のフルシチョフ」と見做し得る人物の名誉がすでに回復され、「中ソ関係を改善せよ！」との壁新聞さえ出現した事実に着目していることを忘れてはならない。この点では、中越戦争によって中ソ戦争の危機さえ唱えられていた去る二月下旬から三月上旬にかけて、中ソ国境河川の航行をめぐる中ソ事務レヴェルの交渉が本年はきわめて順調に推移していた事実も無視し得ないであろう。

"永遠の対立"も神話

つまり、今日の時点は、中ソ関係がすでに極限的状況に達しているだけに、一触即発の危機が存在しつつも、他方では、そうした極限的状況から大きく変化し得る可能性が同時共存しているのだといえよう。

ソ連はポスト・ブレジネフの八〇年代半ばに、今日の軍拡路線が限界に達するといわれている。一方、中国は、「四つの現代化」の成否が八〇年代半ばに明白になるが、この道は決して平坦ではない。アメリカや日本など西側諸国との関係にも、やがて限界があることに気づくかもしれない。そのような時期にいたってもなお、今日のように中ソは対決しつづけるであろうか。かつての中ソ一枚岩の団結は神話であったが、"永遠の中ソ対立"もまた神話でしかないように私には思われる。

（東京外大教授）